

市民プレス

SHIMIN PRESS

1月5日 第63号

2014年(平成26年)

発行人 「市民フォーラム」
 編集人 原 昭二
 制作 デジタル工房
 E-mail hara@camelianet.com
 TEL 090 (3048) 5502
 〒353-0004 埼玉県志木市本町 2-4-43

市民の目線で市民が発信する地域情報紙

WEB SHIMIN
<http://shimin.camelianet.com>

「市民プレス」電子版(無料)を公開しました
<http://pr-shimin.camelianet.com>
 電子書籍専用のアプリケーション等でお読み下さい。

CONTENTS

- PAGE 1 武家政権の行方は・・・ 天下の草創に向かって 皇位継承と後白河天皇
- PAGE 2 頼朝は奥州合戦で藤原氏を討つ 六波羅の新邸に入る 平氏と入宋貿易 清盛と太宰府
- PAGE 3 頼朝の死は落馬か 平清盛は選宮を重ねる・・・
- PAGE 4 焼かれた東大寺の修復 重源上人の勸進 東大寺供養が挙行される 当時の姿を今に伝える南大門

武家政権の行方は・・・

平安時代末から鎌倉時代初期にわたる武將で、政治的な手腕にも長けていた源頼朝は、武家政権を樹立し、以後、武家による政治は、江戸幕府の廃絶まで、約680年間にわたる。

「幕府」とは・・・ 「幕」は帳幕・天幕を意味し、「府」は財宝や文書を収める場所、転じて役所の意という。指揮を取る將軍が出先で張った陣地を「幕府」と呼んだことに由来するとい

われ、武家の政庁を指す。鎌倉の大倉に在った頼朝の邸宅が御所となり、鎌倉幕府が開かれたのであるが、「幕府」の名称が即「武家政権の政庁」を表わすようになったのは、江戸時代中期以降のことである。

源頼朝の驚くべき先見性か？ 鎌倉幕府の正史として編纂された歴史書『吾妻鏡』に、拳兵直後の頼朝が伊豆の蒲屋御厨(現・静岡県南伊豆町)に在り、「御厨」は、神社の厨房のことに住民に宛てた下文(命令書)が収録されている。

(読み下し) 十九日己亥、兼隆の親戚の史大夫知親は當國蒲屋御厨に在り。日者、非法を張行し、土民を憐れ令む之間、其の儀を停止す可し之趣、武備下知を加へ令め給ふ。邦通奉行を爲す。是

關東の事を施行之始め也。其の状に云はく。 下す 蒲屋御厨住民等之所 早々と史大夫知親の奉行を停止す可きの事。

右 東國に至らば、諸國一同庄公皆御沙汰を爲す可し之旨、親王宣旨状に明鏡也者。住民等、其の旨を存じ、安堵す可き者也。仍て、仰せる所の故を以て下す。

治承四年八月十九日 (大意) 治承四年(1134)八月十九日、山木判官兼隆の親戚である史大夫知親が、この伊豆國の御厨で、日常的に非法を行ないとしており、住民の悩みの種になっている。そこで頼朝殿は、藤原通を責任者として、そのような行ないを止めるよう、命令を下した。この一事が頼朝殿の關東に於ける治世の始めとなった。その命令書には・・・

蒲屋御厨住民らに告知する。 連やかに史大夫知親がこの地の支配を停止する事。 右 東國に於いては、諸國全ての莊園、公領に對しての法裁をするように、以仁王の宣旨に明瞭に記されている。住民はこのことを理解して心配しないように、頼朝殿の命に従って知らせる。

十九日己亥、兼隆親親史大夫知親は當國蒲屋御厨に在り。日者、非法を張行し、土民を憐れ令む之間、其の儀を停止す可し之趣、武備下知を加へ令め給ふ。邦通奉行を爲す。是

十九日己亥、兼隆親親史大夫知親は當國蒲屋御厨に在り。日者、非法を張行し、土民を憐れ令む之間、其の儀を停止す可し之趣、武備下知を加へ令め給ふ。邦通奉行を爲す。是

十九日己亥、兼隆親親史大夫知親は當國蒲屋御厨に在り。日者、非法を張行し、土民を憐れ令む之間、其の儀を停止す可し之趣、武備下知を加へ令め給ふ。邦通奉行を爲す。是

十九日己亥、兼隆親親史大夫知親は當國蒲屋御厨に在り。日者、非法を張行し、土民を憐れ令む之間、其の儀を停止す可し之趣、武備下知を加へ令め給ふ。邦通奉行を爲す。是

十九日己亥、兼隆親親史大夫知親は當國蒲屋御厨に在り。日者、非法を張行し、土民を憐れ令む之間、其の儀を停止す可し之趣、武備下知を加へ令め給ふ。邦通奉行を爲す。是

十九日己亥、兼隆親親史大夫知親は當國蒲屋御厨に在り。日者、非法を張行し、土民を憐れ令む之間、其の儀を停止す可し之趣、武備下知を加へ令め給ふ。邦通奉行を爲す。是

十九日己亥、兼隆親親史大夫知親は當國蒲屋御厨に在り。日者、非法を張行し、土民を憐れ令む之間、其の儀を停止す可し之趣、武備下知を加へ令め給ふ。邦通奉行を爲す。是

文治元年(1185)

激動の時代に生きて・・・ 河内源氏、源義朝の三男として生まれた源頼朝は、父が平治の乱で敗れて伊豆國に流される。ここで以仁王の令旨を受けて平氏打倒の兵を挙げ、鎌倉を本拠として関東を制圧する。弟たちを代官として平氏を倒したが、戦功のあった末弟・源義経を追放した後、諸國に守護と地頭を配して力を強めたのは、文治元年(1185)十二月のことだった。

朝廷の刷新に乗り出す この年の十一月、平家一門を滅ぼした頼朝は、「数多の朝敵を降伏せしめ、世務を君に任せ奉る、しかるに何故、後白河院は義経に院宣を下して、私を反逆者扱いされるのか」と述べている(『吾妻鏡』十一月十五日条)。

翌十二月、頼朝が追放した義経と、彼に与する源行家に味方する北側に話めて、上皇の身辺を警備した達(大意) 一通は、後白河法皇にお取次ぎ戴きたり。内容は、師中納言吉田経房に提出しました。今を改める(草創)のときなので、深く考へて申し上げます。まさに天が与えられた機会と考へ、その余はお悩みにならせぬように。このことを右大臣にもお伝え下さい。

その第一は、信頼のできる公卿を選び、「議奏公卿」(院や天皇に對して、政務に関する意見を奏上する公卿) 謹んで 右中弁殿

十二月六日 頼朝(在判) 謹上 右中弁殿

十二月六日 頼朝(花押)

十二月六日 頼朝(花押)

十二月六日 頼朝(花押)

十二月六日 頼朝(花押)

十二月六日 頼朝(花押)

十二月六日 頼朝(花押)

天下の草創に向かつて

政治を論議して天皇に伺いをたてる人は六、七名とし、右大臣・九条兼實、内大臣・左大将の徳大寺実定、吉田経房卿、堀川中山忠親(「山槐記」を書いた人)ほかの名前が列挙されている。右大臣の九条兼實(当時三十七才)に対しては、内覧を兼ね、天皇に提出する文書に予め眼を通し、取捨選択する役を与えることを求めた。

九条兼實という人物は・・・ 撰政・藤原忠通の六男で、五撰家の一つとして、九条家の祖となつた人物である。平氏から恩顧を与えられることを好まず、特定の勢力に属さずに内乱期を通して傍観的な態度を取り続け、内心の不満や批判は自分の日記の中だけに止め、公言したり、後白河院や平氏に正面切つて対峙することをしなかつた。そのため貴族社会の崩壊に直面して苦慮している後白河院にとつて、信を置き難い存在だった。

四十一年間書き綴つた日記『玉葉』は、当時の状況を知る上での重要な史料となっている。同時期の史料として不可欠の『吾妻鏡』は、鎌倉幕府、北条氏の立場で編纂されたので、立場の違いがあり、両者は相補的に用いられる。

文治二年(1186)三月、法皇の寵愛深い撰政の近衛基通が辞任され、代わつて兼実が撰政に任命される。

頼朝の朝廷や院への要請は・・・ 以後、経房を経由して行われるようになる。関東申次、または関東執事ともいわれ、朝廷・院と幕府の間の連絡・意見調整の手段として定着する。

頼朝(花押)

頼朝(花押)

頼朝(花押)

頼朝(花押)

頼朝(花押)

頼朝(花押)

皇位継承と後白河天皇

高倉天皇が即位して・・・ 仁安を改元、嘉元元年(1169)六月、出家して法皇となる。清盛との協調が崩れ、治承元年(1177)には院近臣らによる平氏打倒の陰謀が発覚(鹿ヶ谷事件) 崇徳天皇に皇位を譲り、次の皇位は、鳥羽と藤原得子(美福門院)との間に生まれた近衛に継承させられたので、皇位とは無縁になった。

後白河天皇は・・・ 大治二年(1127)九月、74代鳥羽天皇の第四皇子として生まれ、諱は雅仁。鳥羽が、同母兄の崇徳天皇に皇位を譲り、次の皇位は、鳥羽と藤原得子(美福門院)との間に生まれた近衛に継承させられたので、皇位とは無縁になった。

そのため、政治に関わらず、今様の芸能などに没頭する生活を送つていた。

しかし、近衛が急死すると、美福門院に養育されていた後白河の子・守仁(のち二条天皇)が脚光を浴び、久寿二年(1155)、雅仁が守仁への即位を前提に、中継ぎとして即位した(在位1155-1158)。

保元の乱で・・・ 保元元年(1156)に父の鳥羽法皇が没すると、崇徳上皇および撰政の忠実・頼朝との間で武力衝突が起つたが、後白河は短時間での戦いで勝利する。乱の後、天皇の乳母の夫に当る信西入道(藤原通憲)の指揮で莊園整理を断行し、大内裏を整備して天皇への権力集中を図つた。保元三年に讓位して上皇となるが、その翌年、院は厳しい態度で臨む反面、仏教を厚く信奉して晩年は東大寺の大仏再建に積極的に取り組んだ。

『梁塵秘抄』は・・・ 今様歌謡の集成。編者は後白河法皇。治承年間(1180年前後)の作。「梁塵」は、名人の歌で梁の塵も動いたという故事より、すぐれた歌のこと。

私は常にいませども、現ならぬぞあわれなる、人の音せぬ曉に、ほかに夢に見え給ふ。 のような法文歌や、風景を歌つたものが多い。



後白河法皇像 (宮内庁蔵『天子撰閣御影』より)

「前中略から続く」頼朝は、諸国から争いの訴えなどを多く受けるようになり、また平重衡によって焼かれた東大寺の再建工事なども手がけた。

屋島の戦いで平家を敗走させたころに遡る。元暦二年(1185)三月、東大寺の修復は、国を鎮めるために、丹精を込めて行なわねば、との書状を付して、東大寺・大勧進の重源に宛て、米を二万石、砂金千両、絹千疋を贈った(『吾妻鏡』)。

『吾妻鏡』から・・・元暦二年三月大七日庚寅。東大寺修造事。殊可抽丹誠之由。武衛被遣御書於南都衆徒中。又被送奉加物於大勧進重源聖人訖。所謂八木一万石。沙金一千兩。上絹一千疋云々。御書云。

東大寺事 右當寺者。破滅平家之乱逆。遂逢回祿之厄難。佛像為灰燼。僧徒及没亡。積惡之至比類少之者歟。殊以所歎思給也。於今者。如舊令遂修復造營。可被奉祈鎮護國家也。世縱雖及澆季。君於令施舜德者。王法佛法共以繁昌候歟。御沙汰之條。法皇定思食知候歟。然而如當時者。朝敵追討之間。依無他事。若令遲々候歟。且又當寺事。可致丁寧之由。所令相存候也。仍勒狀如件。 三月七日 前右兵衛佐源朝臣

(大意) 東大寺の再建については、特に丹精を込めるように、頼朝は手紙を書き、また、寄付の品物を東大寺復興委員長の重源上人に贈与した。 東大寺の事について、平家が反逆した時に東大寺は攻撃されて、全焼の災難にあい、佛像を灰にしてしまった。平氏は悪事を積み重ね、実に嘆かわしい。修理・復興して、国の平和を祈るべきではないか。世の末とは言い

ながら、天皇が天下を良く治めれば、社寮泰衡追討の宣旨を求めるが、勅許は下らなかつた。しかし大庭景義の進言によって、勅許を待たず、七月には、一千騎を率いて鎌倉を

義経はついに奥州へ

義経が京都周辺に出没している風聞が飛び交い、頼朝は貴族・院軍は、白河を経て、八月十日、阿波に潜んでいた源行家が討ち取られた。十一月、頼朝は「義経を匿つたり義経に同意しているものがある」と朝廷に強硬な申し入れを行なったので、朝廷は重ねて義経追捕の院宣を出した。 京都に居られなくなった義経は、藤原秀衡を頼つて奥州に赴く。『吾妻鏡』文治三年(1187)二月十日の記録によると、義経は追捕の網をかい潜り、伊勢・美濃を経て奥州へ向かい、正妻と子らを伴なつて平泉に身を寄せたが、一行は山伏と稚児の姿に身を隠していたという。

奥州合戦で藤原氏を討つ 平氏を滅亡させた頼朝にとつて、政権を安定するために、奥州・藤原氏は脅威となつていて、打倒することが必要だつた。 文治三年十月、藤原秀衡が没して、同四年二月、義経の奥州潜伏が発覚すると、頼朝は、秀衡の子息に対して義経追討の宣旨を下すよう朝廷に奏上した。申請を受け、二月と十月に、泰衡(秀衡の嫡男)と補佐役の藤原基成(下向した貴族)に宣旨を下す。同五年(1189)四月、鎌倉方の圧力に屈した泰衡は衣川館に住む義経を襲撃し、ついに自害へと追いやる。六月に義経の首が鎌倉に届くと、和田義盛と梶原景時が実検した。勅許は下されず、しかし・・・

頼朝は、これまで義経を匿つてきた罪は反逆以上のものとして、翌年の建久元年(1190)十月、頼朝は上洛する。続く・次頁上段へ

平氏と日宋貿易

貿易に着目した平氏

平安時代も終わるころ、平家の財力と権力には、並外れたものがあつた。伊勢平氏の武將であつた正盛は白河上皇に重用され、その子・忠盛は、天仁元年(1108)、十三才で左衛門少尉となつたのちに検非違使を兼帯して、京の治安維持に従事した。白河院政・鳥羽院政の武力的支柱の役割を担つて諸国を受領し、越前守となつた忠盛は、宋との貿易に着目した。独自の交易によって入手した舶来品を院に進呈し、近臣として認められる。 平清盛は・・・ 忠盛の嫡男として、元永元年(1118)に生まれる。生母は白河法皇に仕えた女房では、ともいわれているが、定かではない。清盛も、十二才で従五位下・左兵衛佐となつて、昇進を重ねる。 久安二年(1146)、安芸守に任官した清盛は、二十九才で瀬戸内海の制海権を手にし、父と共に西国に勢力を拡大した。宮島の厳島神社を信仰するようになったのは、その頃からといわれる。 瀬戸内海の航路を占有 仁平三年(1153)、忠盛の死後、清盛は一門の棟梁となり、保元の乱(1156)では、後白河天皇に



平清盛公坐像

六波羅権寺(京都市東山区)蔵 鎌倉時代一門の武運長久を祈願し、朱の中へ血を点して写経した頃の太政大臣源平清盛公の像

加勢して崇徳上皇方を破り、勲功で播磨守に任じられる。二年後の保元三年(1158)、清盛は自ら望んで、「大宰大貳」に就任する。これは貿易を管理する筑前国「大宰府」の実質的な長官に当たる。大宰府は九州の行政や司法、軍事の対外交渉権の接収を行なった。音戸の瀬戸は広島県呉市に在り、幅が狭くて潮流が早く、船舶の往来が激しい海域として知られる。清盛の開削は、遡つて仁安二年ころと伝えられる。 厳島神社は・・・ 広島県廿日市市の宮島に所在する。平家一族から崇敬を受け、平清盛によつて、大規模な社殿が造営された(仁安三年ころか)。社殿は災害によつて何度か建て替えられたが、清盛が造営した当時の姿を現在もほほば伝えている。海上に建築された寝殿造りの荘厳華麗な建築として、平成八年、世界遺産に登録された。 大輪田泊を構築する 応保二年(1162)のことにな

内大臣を経て、仁安二年(1167)、二月、清盛は五十才、ついに武士として初めて太政大臣となる。ただし、その三ヶ月後に慌ただしく辞任、表向きは政界から引退して、嫡子・重盛を後継者とすることを内外に表明した。重盛は同年五月、宣旨により東海・東山・山陽・南海道の治安警察権を委任される。 翌、仁安三年、病いのため、六波羅邸を重盛に譲り渡して出家する。「浄海」と名乗り、摂津福原(現・神戸市兵庫区)に移つた。ここに別荘・雪見御所を造営して隠棲したが、平家一門の家長としての発言権を維持し、大事があれば上洛して存在感を見せ付ける。一方、かねてから念願としていた日宋貿易を拡大することに没頭し、厳島神社



瀬戸内海航路の整備

今から三十五年前に、博多の市街地から大量の中国製の陶磁器が発掘され、出土した数は百万点以上にのぼつた。桁外れの量だつたので、白磁の洪水と呼ばれ、また、当時来航していた宋の商人たちの活動を推測させる様々な遺品も発掘された(福岡市埋蔵文化センター)所蔵。お茶を飲むために使つていた茶碗、細工の施された水差しや、香を焚く器などが出土し、彼らは長期間にわたつて滞在していたようだ。 宋の商人たちは、自らの商売の安定を図るため、貿易を管理する大宰府の有力者たちに接近した。当時の記録から、宋の商人と、十一世紀末に大宰府長官を務めた公家・源経信との親しい交流の様子が伺われる。 続く・次頁中段へ

前中から続く。ために鎌倉を発... 遭って討たれる。宿場は一時混乱... 平治の乱で父が討たれた尾張... 国野間、父兄が留まった美濃国青... 墓などを経て、十一月七日、千余... 騎の御家人を率いて入京し、かつ... て平清盛が住んだ六波羅の地に建... てられた新邸に入った。

同月九日、後白河法皇に拝謁し、... 長時間余人を交えず会談した。頼... 朝が熱心に希望していた征夷大将... 軍には任官できず、代わりに権大... 納言・右近衛大将に任じられた。

しかし、ともに朝廷における公事... の運営上重要な地位なので、参加... する義務のある両官を受諾する... と、鎌倉に戻る事が困難になると... 判断して辞任した。

九日の夜、頼朝は九条兼実と面... 会し、頼朝の在京はおよそ四十日... 間に及ぶ。後白河院との対面は八... 回を数え、朝廷と幕府とのわだか... まりを払拭して、新たな局面を切... り開く。義経と行家の捜索・逮捕... のために保持していた総追捕使・... 総地頭の地位は、より一般的な治... 安警察権を行使する恒久的なもの... に切り替わり、翌年、頼朝に対し... て、諸国守護権が公式に認められ... た。十二月十四日、頼朝は京都を... 去って鎌倉に戻る。

征夷大将軍に任ぜられる... 建久三年(1192)三月、後白... 河法皇が崩御し、九条兼実の助言... に拠って、七月十二日、法皇が忌... 避した源頼朝への征夷大将軍の授... 与が実現した。

晩年になってから... 建久四年(1193)五月、御家... 人を集め、駿河国で巻狩を行なう... (富士の巻狩り)。この巻狩で十二才... となった頼朝が初めて鹿を射止め... た。その月二十八日の夜、御家人... の工藤祐経が曾我兄弟の仇討ちに... 頼朝は、大姫が死去したのち、

！ 眞下段から続く。日本初めての... チャイナタウン、「唐防」が作ら... れていて、経信と商人は互いの邸... を行き来し、漢詩を贈ったり、琵琶... の演奏を披露するなど親密な関... 係にあったようだ。

清盛は太宰府を支配する... 清盛は九州での政治基盤を確実... にするため、平氏に反抗的な勢力... の鎮圧に乗り出す。平治元年、肥... 前の豪族、日向通良が朝廷に対し... て野心を抱いているとして、一族... 三百三十五人を討ち取り、都で梟... 首にする。さらに清盛は、大宰... 府の貿易を管理する権限にも目を... つける。その鍵となったのが、原... 田種直である。

彼は九州で勢力を誇る大蔵一族... の棟梁で、大宰府に深く食い込ん... でいた。清盛は種直に嫡男・重盛... の娘を嫁がせ、平氏と種直の一族... との関係が強固なものとする。

宋の商人を福原に招く... 嘉應二年(1170)、大輪田泊... にはじめて宋の船が停泊した。清... 盛が、博多に来航していた宋の商... 人たちを自らの邸宅がある摂津の... 福原に呼び寄せたのである。また... 時を同じくして、朝廷の最高権力... 者・後白河院を京都から招き、こ... こで、宋の商人を院に引き合わせ... た。商人にとって国の最高権力者... との面会は、貿易の保護を約束す... るものであり、それを仲介するこ... とによって、清盛は、自らの存在... 感を高めようとしたようだ。

しかし、こうした清盛の行動を... 公家たちは激しく批判した。天皇... や上皇が外国人と直接会うことは... 三百年以上のタブーとされてきた... ことだった。当時の公家の日記に... は、「未曾有のことなり」「天魔の... 所為か」(九条兼実の日記、『玉葉』... と書かれている。

正式な国交が開かれる！... 承安二年(1172)中国、宋... 明州の地方官から後白河、清盛に... 贈り物が届き、翌年、清盛は答礼... 使を派遣した。また後白河院から、... 宋の商船が大輪田泊まで航行する... 許可を得た。

後白河院と対立する... 安元二年(1176)に建春門院... 滋子が没して、後白河と清盛との... 間には対立が表面化し始めた。

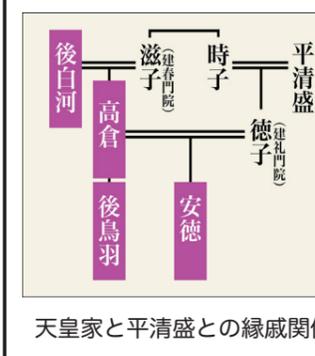
高倉天皇の即位によって政権を... 確立した後白河が、権勢を振るう... 平氏の台頭を抑えようとしたこ... と、一方で平氏は後白河の近臣の... 立場から脱皮しようとしたことが... その原因だった。

治承元年(1177)、法皇の近... 臣が鹿ヶ谷で平氏打倒の謀議をこ... らしたことが発覚し、院の側近が... 処刑される(鹿ヶ谷事件)。法皇と... 清盛との関係はさらに悪化して、... ついに、同三年、清盛は武力を行... 使して法皇の院政を停め、鳥羽殿... に幽閉した。翌四年の四月、高倉... 天皇は、徳子との間に生まれ、ま... だ三才に過ぎなかつた安徳天皇に... 譲位し、上皇として名目だけの院... 政を執る。皇位の継承は混乱を極... め、国政の実権は清盛(当時63才... が握っていた。

打倒平家の旗手が現われる... 平氏に対する貴族・寺社の不満... は強まり、後白河の皇子で、高倉... との皇位争いに敗れて不遇をかこ... っていた仁王が挙兵した。ここ... に源平の争乱がはじまり、次第に... 全国的な内乱へと展開した。

遷宮を重ねる... そこで、清盛は京都を離れ、強... 力な政権を作ることを企てた。同... 年六月、京都から摂津国の福原に、

『平家物語』は... 平家の栄華と没落を描いた軍記... 物語で、鎌倉時代に成立したとい... う。和漢混淆の流麗な文章で書か... れ、「祇園精舎の鐘の聲……」の... 書き出しは普く知られている。保... 元・平治の乱で勝利した平家と敗... れた源家との対照、源平の戦いか... ら、新たに台頭した武士と、没落... し始めた貴族との織りなす人間模... 様を描き出す。



天皇家と平清盛との縁戚関係

